

あやかし草紙

三島屋変調百物語伍之続

装画・本文挿絵 原田維夫
装幀 鈴木成一デザイン室

目次

序

四

第一話 開けずの間

七

第二話 だんまり姫

一二七

第三話 面の家

二七七

第四話 あやかし草紙

三六三

第五話 金目の猫

四七七

序

江戸は神田、筋違御門先にある袋物屋の三島屋では、ここ数年、風変わりな百物語を続けている。

怪談語りの百物語の催しといえば、普通は一夜、ひとつところに人びとが集まり、百本の蠟燭を灯しておいて順繰りに怪談を語って、一話語り終えるたびに一本ずつその火を消していく——という趣向のものである。百話終わって蠟燭が全て消え、場が暗闇に包まれると、本当に怪異が起こるといふ。あるいは、百物語とはそんな遊びの催しではなく、厳しい人生訓を拝聴する学びの場なのだともいふが、やり方としてはおおむねこのような形である。

さて三島屋の百物語は、まず一度に一人の語り手しか招かない。場所は奥の客間へ黒白の間である。語り手に茶菓を供し、差し向かいで聞き手を務めるのは、主人・伊兵衛の姪である十九歳の娘、おちかだ。

おちかは、聞いた話を胸ひとつに収め、けっして黒白の間から外には出さない。「語って語り捨て、聞いて聞き捨て」

これが三島屋の百物語のいちばん大きな決め事である。だから黒白の間を訪れる語り手は、たとえば過去に自分がなした悪事を白状したつていい。恥をさらしたつてかまわない。

おちかは、客が語り易いよう相づちをはさみ、促すことはしても、語りたがらないことは詮索しない。語り手は、話のなかに出てくる場所や名前を伏せたり変えたりしていいし、何なら語り手自身が名乗らなくても差し支えない。

ただ、聞き手が若い娘一人きりなので、黒白の間の次の間には、守り役としてお勝かつという女中が控えている。さらに、前回からは三島屋の次男坊・富次郎とみじろうもお勝と並んで次の間に座るようになったが、この二人は客の前に姿を見せないし、聞いた話を外に漏らさないのは、おちかと同様である。

三島屋は、伊兵衛とその妻・お民たみが振り売りから興したお店だが、今では袋物の人気店として市中に広く知られている。そんなお店の催しで、聞き手のおちかが器量よしときているものだから、評判にならないわけではない。三島屋の商いに客足が途切れぬように、変わり百物語の方も語り手が絶えることはない。

人は語りたがる。胸の内に凝こる話を。

今日もまた一人、黒白の間に新しい客が来る。

第一話

開けずの間

神田の町筋を、この冬最初の木枯らしが吹き抜けてゆく。

早朝、お店のまわりを掃き掃除した丁稚の新太は、寒気に鼻の頭を真っ赤にしていた。腰痛持ちの番頭の八十助は、寢床から起き出すのが辛かったと、ひとしきりぼやいていた。

「ああ、いい季節が来たねえ。一年で、あたしは冬がいちばん好き」

そう言い放つお民は、三島屋の縫い子と職人たちを束ね、自分も先に立って針仕事をしているので、絹物をひっかけちゃいけないからと手荒れには人一倍気をつけているけれど、それでも冬場にはあかぎれだらけになる働き者である。

「おばさん、どうして冬がお好きなんですか」

「あったかいご飯が食べられることの有り難みが身に染みるからさ」

「へそ曲がりなんだよ、おつかさんは」

鼻先で笑う富次郎は、商いの修業のために、ここ五、六年は他店の釜の飯を食っていた。三島屋に戻って初めて迎える冬である。

「わたしは、春の花の盛りや秋の紅葉が夢のように綺麗なときこそ、ああ生きていてよかった、今の暮らしが有り難いって思いますよ」

すると、お民はびしやりと言ひ返した。

「そりゃあ、あんたがまだ本当の苦勞つてもんを知らないからですよ。身体もよくなつたんだし、うちで居食いを決め込んでいないで、もういっぺん武者修行に出てみるかい？」

富次郎は、修業先の恵比寿屋という木綿問屋で奉公人同士の揉め事に巻き込まれ、一時は命も危ぶまれたほどの大怪我を負い、そこからようよう本復して今がある。当時のお民は、その枕頭に付きつきりで看護しながら、富次郎にもしものことがあつたら自分も生きてはいられないと泣き濡れていた。

そんなお民の憎まれ口だから、大事な次男坊がすっかり元気になり、もう不安はなくなつたという喜びの裏返しである。当の富次郎もそのへんは充分に心得ていて、形ばかり首を縮めて逃げ出すふりをした。

「おお、怖。おちか、どうしよう。早いところ身の振り方を考えないと、わたしは三島屋からおっぱり出されちまうよ」

「あら大丈夫ですよ、従兄さん。そんなら〈丸千〉へおいでなさいな」

丸千は川崎宿にあるおちかの実家だ。

「喜一兄さんが大喜びするでしょう」

喜一はおちかの兄、富次郎の従兄だ。おちかも久しく顔を見ていない。江戸市中と川崎宿ならその気になればすぐ会えると思うから、便りのないのは良い便り——と、かえって安心してしまっている。

「うん、そうだねえ」

おちかの戯れ言に、富次郎は存外と真面目な思案顔でうなずいた。

「どのみち、この店の跡継ぎは兄さんと決まっているんだから、わたしは別の商いに転じてみるのもいいかもしれないね。旅籠業も面白そうだしさ」

兄さんとは長男の伊一郎。富次郎とは二つ違いの二十三歳だ。こちらも通油町の〈菱屋〉という小物屋に修業に出ている。弟のような災難に遭うこともなく、大いに働いて頼りにされているが、何と言っても三島屋の跡取りなのだから、そろそろ戻ってくる頃合いではある。

「またそんなことを言って。旅籠じゃ、袋物屋と違うにもほどがありますよ」

兄が小物屋、弟が木綿問屋に修業に出されたのは、どちらも袋物屋と関わりのある商いだからである。

「喜一従兄さんに、一からしつかり指南してもらうさ。で、丸千の商売敵にならないように、鎌倉街道沿いのどっかに旅籠を出そうかな」

富次郎はいつも陽気で馴けているので、大事なことも本気なのか冗談なのかわかりにくい。

「従兄さんは、どこでもお好きなのところに三島屋の分店を出してもらって、袋物の商いに精を出せばいいんですよ。おじさんもおばさんも、とうにそのおつもりでしょう」

長男が本店、次男が分店を守って、三島屋はますます繁盛してゆく。何よりめでたい先行きではないか。

なのに、富次郎は気のないふうだ。

「わたしはね、おとつあんが振り売りからこのお店を興したように、この身ひとつで自分の商いを始めてみたいんだ。そうでないと、自分の器量がどれくらいのもんかわからない」

「わざわざ苦勞を買つてまで、ご自分の器量を知りたいんですか」

「うん、知りたいねえ」

うなずいて、富次郎は笑つた。

「こんなことを言うのは、やっぱりわたしがまだ本当の商いの苦勞つてもんを味わつてないからだろうけどさ」

「ええ、怖いもの知らずな言い様ですわね」

「何だよ、おちかもいい子で、重ね重ねつまんない」

むくれるついでに、いっそわたしが三島屋の苦勞の種になってやろうか、などと言ひ出す。

「おとつあんが商いの虫で、兄さんも生真面目だから、うちのおっかさんは身内の男どもの道樂に泣かされたことがないんだ。この富次郎さんが身を以て——」

「従兄さんが道樂なんかしたら、わたしは荷物をまとめて川崎宿へ歸らせていただきます」

「おや、妬^やいてるの？ 道樂つたつて、女道樂とは限らないよ。飲む、打つもあるんだから」

「小旦^{こだん}那樣」

脅かすような呼びかけに、振り返つてみたら、おしまが唐紙の陰から顔を出している。おしまは三島屋の古參の女中で、富次郎は子供のころから世話になっているから、頭が上がらない。ちなみに、小旦^{こだん}那^なというのは富次郎が自分から言ひ出した呼称である。三島屋の若旦^{わくだん}那^なは伊一郎兄さんだから、わたしは小旦^{こだん}那^なだよと。

「今、道樂がどうこうとかおっしゃつてましたかねえ」

「ああ、そりゃ、ええつと」

富次郎は素直にへどもどする。

「おちかに、有り難い法話を教えていたのさ。ほら、王道楽土のお話」

「まあ、ご立派な。今日は忙しくつていけません、いつかあたしにも、その有り難いお話をしてくださいな」

富次郎をちくりと刺しておいて、おしまはおちかに言う。「お嬢さん、灯庵とうあんさんのとこの小僧さんがお遣いに来てるんです。もうそろそろ次のお客様を案内したいから、都合はどうかっていうんですけど」

灯庵というのは、変わり百物語の当初から、伊兵衛が語り手の周旋を頼んでいる口入屋くちいれやの老人である。脂でてらてらした蝦蟇がまのようなお人で、三島屋の奉公人たちには、こつそり蝦蟇仙人と呼ばれている。

「まあ、そうよね、そろそろよね……」

半月ばかり前に、おちかは、淡く心を寄せていた人との別れを経験した。自分ではそんなに傷心を引きずっているつもりはなかったのだが、叔父叔母が気を回したのか、おちかが物思いをする暇いとまがないよう、外出に誘ってくれたり、商いの方に駆りだしてくれたりしたもので、自然と変わり百物語はお休みになっていた。

おちかも、この先いつまでも休んでいるつもりはない。ただ、変わり百物語の場合は、語り手の話の内容次第でひどく悲しいものになることがある。今さらそれに臆おそするわけではないが、今はまだちょっと気が進まないというのが本音で、つい返答が鈍った。

おしまはすぐと、そのあたりの微妙な気分を察してくれた。さばさばと言う。

「でもねえ、お嬢さんが灯庵さんにせつつかれる謂われはございませんからね」

三島屋に身を寄せて三年、おちかは日々を、おしまやお勝と一緒に働いてすごしてきた。立場としては主人の姪と女中の間柄であっても、気持ちの上では身内のように通じ合っている。

「商いの方も、近ごろじゃお嬢さんがおられないと困ることが多いですし、まだ当分はよしにしておくって言ってやりましょう」

ぱんと軽く畳を打って立ち上がるのを、おちかは引き止めた。「ちよつと待って。小僧さんが本当に子供の使いになってしまつて、灯庵さんに叱られるのもかわいそうだし」

「あら、小僧さんは叱られるのも奉公のうちでございますよ」

すると、傍らで、おちかがお稽古で縫っている巾着袋をいじりまわしていた富次郎が、つと顔を上げて言った。

「じゃあ、わたしが代わろうか」

いたって気楽そうにニコニコしている。

「わたしが黒白の間に座つて、聞き手を務めるよ。この前の語り手のときに、お話のお相伴にあずかっているからさ。要領はわかつてる」

「だって小旦那様、たったいっぺんじゃありませんか」と、おしまが口をへの字にする。「それ



でもう要領はわかつてるなんて言っちゃいけませ——」

「あ痛あ！」

いきなり、富次郎が縫いかけの巾着を放り出して跳び上がった。

「おお痛い。針が刺さったよ！」

縫いかけだから、糸をつけたままの針を布地に刺し留めてあったのである。おちかが慌ててそばに寄ると、富次郎は右手の親指の付け根のところを見せてきた。

「ほらここだ。わあ、血が出てくるよ。おしま、軟膏なんこうを持ってきておくれ」

「そんなに深く刺したんですか」

富次郎は右手を押さえて大げさに騒ぐ。

「痛い、痛い」

何だかんだいっても小旦那様大事のおしまは、慌てて廊下を走ってゆく。その足音が遠ざかると、おちかはくすつと笑った。

「針が刺さってなんかいないでしょう」

血など出ていない。赤くなってさえいない。

「刺さったさ。ちくんとした」

言って、富次郎は舌を出した。

「おちか、この隙に、口入屋の小僧さんに、どうぞ明日にでも次の語り手をお招きくださいって返事をしちまおう」

「おしまさんに恨まれても知りませんよ」

「平気さ。おしまの機嫌の取り方なら、それこそわたしは要領を心得てるから」

そしておちかの顔を覗き込む。

「ねえ、いいだろ。今度は、この頼りがいのある従兄さんに任せてごらんよ」

おちかも従兄の顔をじいっと見る。富次郎は女好きしそうな優男だが、遊び人ふうの崩れたところはまったくくない。おちかと仲良しのわんぱく坊主に、「大部屋役者のような人」と評されたことがある。大人の解釈をつけるなら、見目形はいいのに、ちっと地味だよねというくらいの意味だろう。

「従兄さん」

「はいよ」

「お断りいたします」

「何だよお」富次郎はがつくりうなだれた。

「わたしはそんなに信用ならないかい？ それとも、もう要領はわかったなんて言ったから、気を悪くしたのかい？ あんなの、おしまに聞かせるための方便なのに」

「そんなんじゃないですね。ただ、従兄さんがあんまり熱心なものだから、聞き役を譲るのが惜しくなってきたの」

今度はおちかがぺろりと舌を出してみせた。

「おお、意地悪な娘だねえ」

「根っからの意地悪じゃございませんから、また従兄さんが次の間に隠れてお話を聞くのは許してさしあげます」

「ふふん。お心の広いことで、ありがとうございます」

富次郎は笑って、

「まあ、いいや。おちかが元氣なら」

従兄さんは優しい。外では木枯らしが吹き、手あぶり一つでは指先も冷えるようだが、おちかの心はほんのり温まる。

「はい。しゃんと元氣に、次の語り手の方をお迎えいたします」

灯庵老人のところでは、「三島屋で語りたい」という方が溜^たまっていたらしい。いい返事を持たせて小僧さんを帰したら、本^{ほん}当^{とう}にその明^あくる日^ひに、新たな語り手が訪れた。

いつものように黒白の間、八ツ時（午後二時）だ。おしまが案内して来たのは、歳の頃は三十から三十半ば、中肉中背、ふっくりした丸顔の人である。立ち居振る舞いは一見して客商売のそれで、きびきびしている。

本^{ほん}結^{ゆう}城^{きやう}縞^きの艶^{つや}のある小^こ袖^{そで}を着ている。お店^{たな}者^{もの}だとしたらそこそこの大^お店^だ奉^{ほう}公^{こう}で、番頭ではなからうが平^{ひら}手^て代^{だい}よりは格上だろう。あるいは表^{うへ}小^こ店^{てん}の主人、つまり小さくとも一店の主人かもしれない。

「ようこそ三島屋の変わり百物語においでくださいました」

おちかが挨拶^{あいさつ}し、「語^{かた}って語^{かた}り捨て、聞^きいて聞^きき捨て」などの決^{けつ}め事^{こと}を言^い上^あしているうちに、おしまがしずしずと茶菓^{ちか}を運^はんでくる。今日の菓子^{かし}は扇^{あふ}の形^{かたち}の練^ねり切^きりと小粒^{まじゅう}の饅^{まん}頭^{じゆう}だ。中身^{なかみ}のこしあんがうつつらと透^かけて見^みえる白^{しろ}い皮^{かわ}は、口^{くち}に入^いれると溶^とけるようだと、近^かごろ神^{かみ}田^{でん}界^{かい}限^{げん}で評判^{へいばん}の品^{ひん}である。

旨い物に目のない富次郎は、来客に先んじて次の間に入るとき、

「わたしの分も饅頭をとっておいておくれね。一つじゃないよ、三つだよ」

子供のようなおしまを言いつけて、

「小旦那様には、わたくしの分も差し上げますわ」と、お勝にあやしてもらっていた。

変わり百物語の守り役であるお勝は、黒髪豊かな柳腰の美女なのだが、顔にも身体にもたくさんあばたの痘痕がある。疱瘡ほうそうという病のもっとも酷いしるしである痘痕だが、しかしこれは一面、疱瘡神という強い力を持つ疫神えきがみに愛でられ、その霊力の一端を授けられた証あかしでもあるという。

お勝はその霊力を以て、怪談語りをする黒白の間に寄りつく邪気と禍まがを祓はらってくれる。おちかにとっては頼もしい相方であり用心棒でもあるのだが、富次郎が加わって以来、彼のお守りも兼ねるようになったのが可笑しいやら微笑ましいやらだった。

さて、いざ語り手と向き合えば、おちかは一人だ。訪れた人が存分に語れるか、語りきれずに帰ってゆくか。半分はおちかの裁量に、半分は語り手にかかっている。

真に全てを語ろうとする人か。

己の語りたいことだけを語ろうとする人か。

ただただ語らずにはいられない人か。

丸顔の語り手は茶菓を供するおしまに軽く頭を下げ、そのまま神妙に、小皿の上の饅頭に向かつてかしまっている。しみじみと見入っているようにも見えた。

何か気になることがあるのかと思い、おちかはやわらかく声をかけた。

「あの……甘い物はお嫌いでしたか」

語り手は面を上げ、瞬^{まばた}きをして、

「いや、こりゃいけません」

頭をかきかき恐縮する。

「とんでもねえ、手前、甘いものは大好物でございます。あんまりきれいな饅頭なんで、つい見とれちまいました」

小皿を持ち上げ、顔を近づけて、つくづくと饅頭を眺め回す。

「中秋の名月のような、透き通ったまん丸ですねえ」

「はい、まさに名月饅頭という名で売り出されているそうですわ」

「へえ。子供のころ、指をくわえて眺めた饅頭のこととも思い出すなあ。や、いきなり食いのことばかり言っちゃって」

小皿を置き、膝^{ひざ}の上に手を揃えた。

「手前の名は平吉^{へいきち}と申します。女房と舅^{しゅうと}と三人で、吾妻橋^{あづまばし}の近くで〈どんぶり屋〉という飯屋をやっております」

黒白の間には老若男女、身分も立場も様々な語り手が来て、とりどりの語り方をする。「手前^{てまえ}が「てまえ」ではなく「てめえ」に聞こえるあたり、平吉はざっつかけない語り手だ。何となく愛嬌^{きょうこう}があるのは商売柄か、人柄か。話を聞いていくうちにわかるだろう。

「その屋号には、由来がおりなんですか」

「あら、お嬢さん、由来なんて上等なもんじゃありませんや。ただ、どんぶり飯が売り物だっただけのことですよ」

飯とお菜を大きめのどんぶりに一緒盛りにして出す飯屋なのだという。

「もともと舅の店なんです、もう三十年から昔に、小鉢だの皿だの使うと洗いもんばかり増えて忙しくって面倒だ、器はどんぶり一つで上等、それが嫌だっていう客はこちからお断りでえと決めちまいます」

確かに、それなら洗いの手間はうんと減る。食いしん坊だから食べ物商いにも詳しい富次郎なら知っているかもしれないが、おちかには初耳の飯屋のやり方である。

「そうしますと、まずどんぶりにご飯をよそって、その上にお菜を載せて出すわけですね」

「へい。およそ愛想のねえことで」
お菜は日替わりで二種。常備の佃煮が三種。どちらも客に好きなように選んでもらって盛りつけるのだという。

「お菜の味がご飯に染みて、美味しそうです」
平吉はひらひらと手を振った。

「お嬢さんのような方に褒めていただくような店じゃござんせん。何しろ安くて手っ取り早いのが取り柄で——」

と、いきなり次の間の方で声があがった。

「そりゃあ、へりくだり過ぎつてもんだ、どんぶり屋さん！」

ついで、次の間との仕切りの唐紙が開き、富次郎が身を乗り出してきた。

「おたくの評判なら、市中のあっちこちで耳にしますよ。旨い物好きのあいだじゃ、吾妻橋たもとの〈どんぶり屋〉の日替わり飯こそが食道楽の極みだって意見もあるくらいだ」

あらら。食いしん坊の従兄さん、隠れて聴いていられずに、もうご登場である。おちかは片手で顔を覆った。

「おっと……あの、どちらさまで」

へどもどする平吉にかまわず、富次郎はさつさと黒白の間に入ってきて、おちかと並んで座り直した。お勝の白い手がちらりと見えて、唐紙が音もなく閉まる。

「あいすみません。わたしはこの三島屋の倅で、おちかの従兄にあたる富次郎という者でございます」

「わわわ！ そりやまた、こりやまた」

平吉は泡を食って座布団から滑り降り、まん丸くなって畳に指をついた。

「三島屋さんのお客間は、手前のような飯屋ふぜいが足を踏み入れるようなところじゃねえってことは承知の上のこんこんちきですが、灯庵さんの口利きがあつたもんですからうつかりその気になりまして、こうしてお邪魔しちまいました。お嬢さんにはけつして悪さはしておりませんし、手前の言葉つきが汚えのは生まれも悪けりや育ちも悪いせいで、本人には悪気はござ



いませんでどうか一つご勘弁を」

ぺこぺこしながら謝る、謝る。

富次郎はぽかんとする。おちかもぽかんとする。顔を見合わせ、富次郎が先に我に返った。

「ちよつとちよつと、平吉さん。お手を上げてくださいよ」

「いやもう平に平にご勘弁を」

「わたしはこのとおりの若造で、あなたは評判の飯屋のご主人だ。しかもこちらからお招きしたお客様ですよ。そんなに小さくなられたら、わたしの方が困ります」

おちかはさらにこみ上げてくる笑いを堪える。承知の上のこんこんちき。何かの折に使ってみたい言いまわしだ。

「だいいち、あなたはこつちがへご勘弁」しなくっちゃならないことなんぞしてませんよ」

平吉は大汗をかいている。「いや、けども若旦那はこのべつぴんのお嬢さんの許婚者でいらつしやるんでしょ？ 手前みたいながらっぱちがお嬢さんと差し向かいでお話なんざ、いい気分がしなくて当然だよね」

「は？」

富次郎とおちかは、また揃ってぽかんだ。

「許婚者？ 誰が」

「ですから若旦那が」

「わたしはへいとこ」と言っただけです」

い、と、こ。富次郎がもう一度繰り返すと、平吉はまだ丸まって小さくなったまんま、

「へ？」

とうとう堪えかねて、おちかは笑いだしてしまった。

「どんぶり屋さん、あわてんぼうなんですね」

富次郎も笑い、平吉もおそろのおそろ顔を上げて、笑い合うおちかと富次郎を見比べ、やつとこさ自分の勘違いが呑み込めたようだ。

「そうなんですよ、お嬢さん」

しおしおとうなじを撫でて、

「手前はガキのころから粗忽者^{そつもの}でしてね。いまだに、しょっちゅうお客の注文を聞き違えるわ、間違えたのを直したつもりでまた間違うわ」

座がほどけてきて、三人で笑った。

黒白の間を訪れる語り手が、聞き手のおちかに馴染^{なじ}んでくれるまでの段取りにもいろいろある。胸に秘めてきた話を吐き出したい一心でほとんど前置きをしない人もいれば、なかなか吐き出す決心がつかずに黙りがちの人もいる。世間話ばかりして本題に入らない人もいる。このどんぶり屋さんは、さていかに。

「こんな立派な床の間つきのお座敷の上座に、座布団をいただいて座るなんて、手前にやもったいなさ過ぎることです。てんで柄じゃねえ。おまけに差配さんからよそ行きを借りて着て来たもので、つっぱらかっちまって息もうまくできねえや。みつともなくつてすみません」

平吉は袂^{たもと}から手ぬぐいを引っ張り出し、額の汗を拭^ふいている。なるほど、この本結城縞は借り物だったのか。

「お詫^わびしなきゃならないのは、むしろこちらの方ですよねえ」と、富次郎が言う。

「三島屋の変わり百物語の聞き手は、ここにいるおちか一人。伺ったお話はけっして外に出さないことが身上だとうたっているのに、実はこっそり聞いている者がいるなんて」

「そんなのはちつともかまいませんや。大事なお嬢さんを、どこの馬の骨とも知れねえ野郎と二人にしておけるわけがねえ」

「有り難いお氣遣いです。じゃあ、このままお話をしていただけですか」

平吉は、半身を折るようにしてうなずいた。

「もちろん、手前のつまらねえ話を聞いてくださるなら、お耳を貸してやってくだせえ」

いくぶん、ほっとした様子だ。

「白状しますと、お嬢さんには申し訳ありませんが、若旦那もいてくださる方がしゃべりやすいんです。これは……まあこのはんちく野郎の身の上話ではあるんですが、夫婦や親子のいざこざ話がひつからまつてるんです」

手前の生家^{うち}に起きた出来事でして――

「えっと、すみませんがその前に、なんでまた手前がこんな昔語りをしたくなったかってことの方を、先に言っとかないといけませんかね」

ちつともすまなくはない。ここに来る語り手は、たいてい、〈語る話〉と〈語る理由〉の二つを持っている。

「手前と女房のあいだには、ガキが三人おります。長男が十二、次男が十、末っ子は娘で、これが七つ」

この七つの子が、今年の春先に風邪をひき、それが長引いてなかなか治らない。とりわけ咳せきがしつこく残った。

「普段は何でことねえんですが、何かの拍子にいったん咳が出始めると、ぜえぜえあえぐほど続くんですよ。食った飯を吐いちゃうわ、夜も眠れないわ、苦しがつて顔が真っ赤になったり、息が切れて真っ白になったり」

もともとか細かった女の子が、さらに擦り切れるように瘦やせてゆく。

「それはご心配でしたね……」

「可哀相になあ」

「へえ。やつと七つまで育てたのに、ここでとられちゃうのかなあと、手前もいったん諦あきらめかけたぐらいです」

もちろん、平吉夫婦はできるだけのことをした。金をかき集めて評判のいい町医者を訪ね、高価な生薬きぐすりを買い、咳に効くというまじないなら片っ端から試してみた。

「どれも効きやしませんでした。まあ結局は、日にち薬というんですかねえ。夏の暑い盛りを過ぎて、朝夕に虫がちろちろ鳴くようになったら、自然と治ったんです」

「ああ、よかったわ」

「へえ。ですがねえ……」

娘が無事治るまでのあいだに、一騒動があった。事の発端は、平吉の女房が、娘の病平癒の願掛けで「塩断ちをする」と言い出したことだという。

「塩断ち？　塩気のあるものは一切口にしないということですね」

「近所のお地藏さんに願掛けするのに、供え物して手を合わせるだけじゃ足りねえってね」

——あたしも何か我慢して、これくらい必死にお願いしていますってお見せしなくっちゃ。

——お地藏様は慈悲深い仏様だから、あたしが塩断ちをしたらきつと哀れんでくださる。たちまち願いが届くわよ。

「何かもう、目が据わったみたいになつて言うわけですよ」

確かに巷^{ちまた}では、願掛けの○○断ちというのは、辛ければ辛いほど、難しいことであればあるほど、当人の願いの強さを神様にお見せすることになるから効き目があるのだと言う。

「手前は、とんでもねえと思いました。そんなこと、けつしてやらせちゃならねえって」

「どうしてですか」

おちかの問いに、平吉はぐつと息を呑んだようになり、喉仏^{のどぼとけ}が上下した。

「——おつかねえことになるからです。手前の生家は、それで絶えちまった。手前一人残して、みんな死んじまったんだから」

ずしんと重い。おちかも富次郎も、ちよつと身を引いた。

「なるほど。そりゃ恐ろしい」

ゆつくりと、富次郎が合いの手を入れる。

「平吉さんがおかみさんを止めようと思うのも当然です。で、どうなりました？」

「手前は、その」

平吉は汗をかき始め、早口な上にしどろもどろになってきた。

「今こうしているみたいに、すんなりと理由^{わけ}を言えなくって」

——塩断ちなんかしたら、おつかねえことになるぞ！

「ただ、やたらに女房を怒鳴りつけちまったんですよ」

思い詰めた顔をしている女房を説くよりも、宥めるよりも、かっとなだしてしまつた。

「寝ぼけたこと言つてンな、余計なことしねえで娘の世話をしつかりやれつて」

それでも女房が引き下がらないので、つい手をあげた。

「感心できたことじゃないが、夫婦喧嘩にはまゐることでしょうよ」

「けども、手前はそれまで、女房を叩いたことなんかいつべんもなかったんですよ」

なのに、そのときは籬が外れたようになってしまつて荒れ狂つた。

「立て続けにこう、こう、こうと叩きまして、女房が泣き出しても止まらねえ。無我夢中で、自分じゃよく覚えていねえんですが、そのあいだじゅう、亭主に口答えすンな、俺がやめろつて言つてんだからやめろつて、泡を噴いて喚き散らしていたらしいんですよ」

ちよつと尋常ではない。

「うちの舅つて人は無愛想で、口数も少なくてね。普段は手前と女房が喧嘩しようが、ガキめらを叱ろうが、知らん顔でほったらかしなんですよ。けど、さすがにこのときは顔色を変えてすつ飛んできて」

身体ごとぶつかつて平吉と女房のあいだに割り込み、二人を引き離した。

「それで、手前もやつと我に返りました。女房は縮こまつて泣いてる。近所の連中も集まつてきてて、舅に加勢して手前を押さえつけてる。もう大騒ぎですよ」

気がつけば、平吉は水を浴びたように冷や汗をかいていた。情けなく、恥ずかしく、身を焼か

れるような心地だったと言う。

「取り返しのかねえことをしでかしちまった。穴があつたら入りてえ、その穴に土をかけて埋めてもらいてえ、その土の上から踏み固めてもらいてえ——」

「わかつたわかつた。それくらい後悔したんだよね」と、富次郎が遮る。「で、おかみさんと舅さんは許してくれたんですか」

「へい。手前が泣いて謝りましたし、舅も女房も、あんなときの平吉はどうにもおかしかつた、いつものおまえさんじゃなかつたって、むしろ案じてくれましたもんで」

——娘の病が心配で、おまえさんと思い詰めてたんだね。

「いい人たちだなあ」

「手前にもつたいねえです。もう一生頭が上がらねえや」

近所の人たちにも心配をかけたから、平吉はその後どぶ掃除に励み、それを女房も手伝つてくれたという。ますますいい女房、いい夫婦ではないか。

「結局、おかみさんは塩断ちなさらなかつたわけですね？」

「へい、しないで済みました」

舅が、毎日うちのどんぶり飯をお供えして願掛けしろと夫婦に勧め、夏を越したら娘の咳も止まつて、めでたしめでたし。

「お地藏様だつて、塩断ちよりもどんぶり屋さんの飯の方をお喜びになるに決まつてる」

涎よだれを垂らしそうな顔をして、富次郎は食いしん坊らしいことを言う。まったく、ここは食いの談義の場ではないのに。

「その後、おかみさんや舅さんに、塩断ちのことで平吉さんが怒って取り乱した本当の理由をお話しになりましたか？」

平吉は黙ってかぶりを振った。

「言えないままになってしまっただんですね」

今度は黙ってうなづく。一度、二度。

「だから胸がつかえている。そうですね？」

「お嬢さん、手前は——」

また何度か喉をぐくりとさせ、拳で額の汗を拭うと、平吉は顔を上げた。

「自分が今でもこんなにおっかながっているなんて思っただけです。昔のことは昔のこと、もうとつくに終わってますからね」

今までだって、とくに隠していたわけじゃない。進んで語るような話じゃないから黙っていただけだ。思い出しても平気だと思っていた。

「なのに、女房が塩断ちの話をし始めたとなんに、目の前が真っ暗になって、息苦しくなって、膝がガタガタしてどうしようもなくって」

分別も男気も消し飛び、子供のように怯えている自分を見つけた。

——俺は、今でも逃げ切れてねえんだ。

平吉は生家で一人だけ生き残った。しかしまた囚われている。

「何度か、女房と舅に打ち明けようと思ったんです。案外、しゃべっちゃまった方が気が楽になるんじゃないかって空頼みで」

だが、どうしてもできなかった。

「あんまり突飛な話なんで、信じてもらえねえかも——」

言いさして、強いかぶりを振る。

「いや、そんなじゃねえな。この話をうちのなかに広げるのが嫌なんだ。話すことで何かこう……すぐくおっそろしいものを、うちのなかに呼び込んじゃうような気がして」

そこで、にわかに赤くなって跳び上がった。

「すみません！ 手前のうちには広げたくねえ話だけど、三島屋さんならかまわねえって見じゃねえんです！」

「語ってしまえば、消えますよ」

声音は優しく、姿勢は凜と、おちかは言った。

「わたしどもが、右から左にきれいに聞き捨てにいたしますから」

「だけどお嬢さん、おっかなくなつて忌まわしいことなんですよ」

「三島屋の変わり百物語は、今まで何人も平吉さんのような方をお招きして参りました」

語り終えて重荷を下ろした人がある。もう思い残すことはない、死を選んだ人もいる。生き霊が語りに来たことだつてある。

それを聞いて、平吉の顔から血の気が引いた。

「へ……い、生き霊？」

「はい。ですから、ちよつとやそつとのことでは驚きません。ねえ、従兄さん？」

「おう、ほんと来いですよ」

一瞬、富次郎の目が泳いだことには気づかないふりをしてあげよう。

「どんなお話が来たって、障りなんか毛ほども残らないよう備えもしております。どうぞ、安心してお話しくださいな」

平吉はおちかを見つめ、ついで富次郎に目を移して、

「若旦那、本当によろしいですか」

富次郎の聞き手としての経験が浅いことを見抜いているようである。平吉も客商売なのだ。短
いあいだに人を見分ける目がある。

「もちろんですよ」

従兄さん、ホントに頼みますよ。

「あのね、平吉さん。わたしのことは、若旦那じゃなくて小旦那と呼んでください。若旦那はう
ちの兄貴だから」

些末なことに几帳面である。

借り物のよそ行きの衿元を調べ、両手を膝の上に置き、覚悟を決めて一つ息を吐くと、

「それじゃお嬢さん、小旦那さん」

どんぶり屋の平吉は語り始めた。

「うちは三好屋^{みよし}って屋号の金物屋で、お店は元吉原^{もとよしわら}の大門^{おもん}通りにありました。ご存じでしょうが、
あのへんには金物屋が集まってましてね。うちもそのなかの一軒でした。身内と住み込みの奉公
人たちを合わせて、何だかんだ二十人近い所帯でねえ。職人衆もよく出入りしてましたから、ま

あ騒々しいし賑やかな家でしたよ」

あわてんぼうの平吉は、語りも早口である。いざ語るとなったら、また怖じけぬうちにこの話を吐き出してしまいたいと焦る気持ちもあるのかもしれない。

「ンで、そもそもこの話の始めは、もう二十二年前のことになりますが、手前の姉が——えっと、すぐ上の姉ちゃんこれが三番目の姉ちゃん——姉は三人いて兄貴も三人いて」

それだけ人数がいてこの早口では、早々に誰が誰だかこんがらがりそうなので、おちかはこちらが舵をとることにした。

「三好屋さんは、旧いお店のですか」

平吉は前のめりになっていたのを引き止められた感じで、うつと口をつぐんでから、いえいえと大きくかぶりを振った。

「手前の祖父さんが興した店で、親父が二代目ですから、あの町筋の金物屋のなかじゃ、むしろ新参者の方でした」

「平吉さんのお祖父さんとお祖母さんが大旦那とおかみになるわけですね」

「でも祖父さんは手前が生まれるよりも前に死んじまいましたし、祖母さんも、手前が二つのときにぽっくり」

「そうしますと、このお話の出来事があつた当時のご家族は、ご両親とご兄姉と平吉さんの九人ということになりますね」

「へえ」

「これからお聞きするお話は、ご家族の皆さんが巻き込まれた出来事なんですよね」

みんな死んだと、平吉は言っていた。

「そうですよ、ええ」

「では、皆さんのお名前を伺っておいた方がいいでしょうか。お嫌でしたら、本当のお名前ではなくて、太郎さん次郎さんでも結構ですが」

「そうか、そうだよねえ——」

平吉の目がちよつと泳いでいる。

「いんや、やめときましよう。しゃべってるうちに手前の方が忘れちまうのがオチです。まず長男が松吉、二番目が竹蔵、三番目の兄貴が梅吉といいました」

松竹梅の並びである。

「お姉さんも三人」

「上の姉ちゃんがおゆう、二番目がおりく、三番目がおみち」

「並びはどうなります？」と富次郎が問う。

「並び？ ああ、松吉、おゆう、竹蔵、梅吉、おりく、おみち、それで手前です」

うちの両親は子でくさんで——と、平吉は頭をかく。

「ほかに二人、手前の上に子供がいたんですよ。一人は生まれてすぐに、一人は死産で亡くしましてね。おふくろはよく手前に、この子たちが育ったらおまえを授かることはなかったろう、だから、おまえは合わせて三人分の命を背負ってるんだって言ってたもんです」

おまえはそれほど可愛い末子だよ、という意味もあったかもしれない。

「そんなんだから、長男の松兄と手前のあいだは十八離れてました。兄弟というより、叔父さん

みたいな感じがしてねえ」

「そうでしょうね。お話の出来事が起きたときの皆さんのお歳は」

「駄目だ、おちか」

軽く両手を挙げて、富次郎が割り込んだ。

「ちよっとお待ち。わたしは覚えきれないよ。書き留めていいかい？」

おちかは平吉に訊いた。「よろしいですか」

平吉はうなづく。「お手間ですが、そうしてください。ほかに、兄貴たちの嫁さんだの姉ちゃんたちの縁談相手も出てきますんで」

「うへえ、ここからまだ増えるのかい。奉公人や職人たちはどうです」

「そつちはほとんど出てこねえから、ご安心ください」

文机と文箱は次の間に置いてある。おちかがつと立って唐紙を開けようとすると、富次郎は帯に挟んだ矢立を抜き、

「紙だけでいいよ、おちか」

次の間では、お勝が文箱のなかから半紙を取り出して、するりと差し出してきた。

富次郎は半紙を畳の上に並べ、筆先を揃える。

「お話が済んだら、すぐ火鉢で燃やしちまいますからね。さて、まずご両親から」

「親父は五十二、おふくろは四十七」

富次郎は筆先を細かく動かし、声に出して言いながら書き留める。

「三好屋主人、五十二歳。おかみ、四十七歳」

「ご長男の松吉さんは」

「二十八でした」

「兄さん姉さんは三人ずついるからなあ。何か特徴がおありでしたら——」
平吉はすばつと答えた。「放蕩者^{ほうとう}でした」

富次郎は片方の眉^{まゆ}を持ち上げた。

「ふむ。どちらの方ですか。つまり、飲む打つ買うの」

「女の方ですよ。早生^{わせ}でねえ、肩揚げがとれたかと思つたら岡場所の味を覚えちまつたそうでお
ふくろがよくこぼしていました」

「女好きする優男^{ゆうなん}だったとか」

「いんやあ、親父に似た馬面^{ばめん}で」

富次郎は字が上手^{うま}い。恵比寿屋にいたころに
遊びで習つたことがあるとかで、絵心もある。

「長男松吉、道楽息子^{だらくこ}」

と言いなから字を書いて、その下に銀杏^{いちょう}髻^{まげ}を
載せた馬面の輪郭を描いた。

「長女のおゆうさんは」

「二十六で、出戻りでした。十九で嫁に行つて
二十四で離縁されて戻つてきましてね。珍しく
もねえ話ですが、姑^{しゅうとめ}さんと反りが合わなかつ



たんです」

「子供さんは」

「いました。離縁のとき三つで、男の子なんで向こうにとられちゃいました——けど」

「あとで出てきますか」

「へい、すんません」

「じゃ、この子こそ太郎にしよう」

富次郎は「おゆう」の名の下にしの字わげ鬚ののつぺらぼうを描き、その白い顔の脇に小さな○を描き足して、「太郎」と書き添えた。

「次男の竹蔵さんは」

「二十五です。おふくろに似た丸顔」

嫁のお福は二十二歳で、嫁いで来て四年。子供はまだいなかった。

「しょうもねえ松兄に代わって、この竹兄夫婦が三好屋の跡継ぎでした」

富次郎は若夫婦の輪郭を並べて描き、若旦那若おかみと書き添えた。

「お次は、三男の梅吉さん」

「十九です。病弱でした」

子供のころから弱かったようだ、と言う。

「季節の変わり目や、夏の暑い時期や冬の寒い時期になるとよく寝込んでしまう。一年のうち、調子がよさそうなのは春と秋のほんのいつときで、あとはたいがい寝間着姿でいるような兄貴でしたよ」

富次郎は梅吉の輪郭を細く描き、のっぺらぼうの顔のなかに〈病〉と一文字書き入れた。

「次女のおりくさん」

「十七でした。縁談がまとまって、嫁入り支度をしてるところで」

言って、平吉は小声になった。

「優しい姉ちゃんでしたが、気の毒なことに親父や松兄に輪をかけた馬面だったんです」

富次郎は紙を替え、島田^{しまだ}鬘^{まげ}に思いきつて顎^{あご}の長い女ののっぺらぼうを描き始める。

「縁談も、こっちから持参金を積んでやつとこさまとめたんだらうって、近所じゆうでくさされてましてね」

気の毒でたまらなかったと呟^{つぶや}く平吉は、昨日のことのように悔しそうだ。

おちかは、横から首をのばして富次郎の手元を眺める。富次郎の指先は、いつそ酷^{むご}いほどの馬面の女の鬘^{たまかんざし}に、玉簪を描き添えてゆく。

「三女は、おみちさんですね」

問いかけに、打ち返すように平吉は言った。

「こいつは性悪でした」

おちかは目を瞠^{みは}ったし、富次郎も筆先を宙に浮かせて平吉を見た。

「すみません、手前の姉ちゃんのことですが、確かにそうだったもんで」

「お歳は」

「十六です。ンで、三人の姉ちゃんのなかではもちろん、地元でもいちばんの器量よし、評判の小町娘^{こまち}だったんです」

富次郎は下ぶくれの娘の輪郭を描き、桃割れの鬢を描き足した。さらに、この顔だけは眉と両目も入れ始めた。

「小娘のくせに、横合いから手え突っ込んで、おりく姉ちゃんの縁談を盗みやがって」

「ははあ。その話も、本題と関わりが？」

「おありですよ！」

やりとりをしながら、富次郎は娘の目と眉を描いてゆく。目尻が吊り上がり、眉の両端がかすかに歪んでいる。

「小旦那は絵がお上手ですねえ」

平吉も上座から身を乗り出し、畳に両手について覗き込んでいる。

「で、末っ子が平吉さんだ。いくつでした？」

「十でした。あ、小旦那、手前は今でもそうですが、猫っ毛で髪が少なくなつてね」

確かに平吉の鬢は小さく、鬢もたぼも厚みがない。

「あのころはまだ坊主頭でした」

富次郎はそのとおりに描く。顔は描かず、輪郭のなかに〈そこつ〉と書き入れた。

「これで間違いありませんかね」

二枚の半紙を平吉の方に向けて見せると、

「へい、このとおりです。顔がなくなつても、みんなそれらしく見えらあ」

こうして書き並べてもらったら、おちかにもぐつとわかり易くなった。

半紙に描かれた顔の列を眺めながら、平吉は自分の鬢に手をやった。

「おりく姉ちゃんも、手前と同じで髪が少なかったんですよ。だから、島田を結つても銀杏返しにしても、何だか貧乏くさくつてねえ」

美女を「緑の髪豊か」というのは故のないことではない。女の髪が薄いと鬢が貧弱になり、パツとしないきらいはある。

「鬢が小さいと、なおさら馬面も目立っちまうし。とことん損に生まれついた姉ちゃんだったなあ」

今度はさっきのように悔しがるのではなく、哀れんでいた。若死にした兄や姉たちを追いつく歳になった平吉の、一人前の男としての感慨である。

「さて、これで役者は揃いましたよ」と、富次郎が言う。「あとから出てくる人たちは、順に足していきますからね」

「ありがとうございます。書いてもらったおかげで、手前も語りやすくなりました」
まずですね——と、懷手をして二枚の紙を見回し、長女・おゆうを指さした。

「話のとお始めは、このおゆう姉ちゃんなんですよ」

おゆうが十九で嫁ぎ、二十四で追い出された婚家は、大川を渡った先の本所ほんじよにある質屋だったそう。

「祝言を挙げたころ、手前は物心ついたかつかねえかのガキでしたから、先様の顔も見ちゃいませんがね。確か、親父が寄合で親しくしていた仲間の親戚しんせきだとか聞いた覚えがあります。質屋つてのはだいたい金持ちだし、縁談としちゃ悪い話じゃなかったんでしよう」

しかし、おゆうにとっては良縁ではなかった。

「旦那は一人息子だったんで跡継ぎでもあり、姑さんにとつては大事な大事な宝物ですからね。おゆう姉ちゃんも、最初っからえらくいびられたようです。離縁になる前にも、いっぺん泣いて帰ってきたことがありましたからね」

どういふ経緯だったのかはわからないが、そのときおゆうが裸足だったことは、平吉もよく覚えていたという。

「まあ、箸の上げ下ろしどころか息の仕方、まばたきの数にまで文句を言う姑さんだったっていますから」

そんななかでも、おゆうはすぐ赤子を授かった。ところが、

「月満ちて生まれたのは女の子でしてね。これがまた姑さんのいびりの種になっちゃった」

——女の子なんぞ役立たずの無駄飯食いだ。男の子を産めない嫁も役立たずだ。

「そういうご自分だって、昔は女の子だったんでしょに」

ついムツとして、おちかが強く言うのと、平吉は首を縮めた。

「まったく、お嬢さんのおっしゃるとおりです。自分はお店のなかで威張り放題の姑さんだったようですから、勝手なもんですよね」

女の子は、乳離れをするすぐに姑の采配で養子に出され、おゆうは泣き暮らした。

「毎日泣いて泣いて、飯も食えねえほど泣いて寝れてるっていうのに、さあ早く男の子を産めつて急ぎ立てる、まず山姥も裸足で逃げ出す鬼姑ですよ」

ようやく男の子が生まれると、大喜びした姑は、赤子をまるつきり抱え込んでしまい、おゆうのことは乳を出す女中ぐらいに扱ってはばからない。舅も夫も取りなしてくれず、とうとう我慢

の切れたおゆうが仲人^{なこうど}のところに駆け込むと、「そんな嫁は離縁だ！　とつと出て行け」となったのだという。

「おゆう姉ちゃん、最後に一目だけでも太郎に会いたいって訪ねていったら、怒鳴りつけられた上に塩をまかれちゃった」

その後も、太郎に会うことはかなわなかったという。

「姉ちゃん、悔しがりましてね……」

平吉は口元をへの字にして、遠いところを見る眼差^{まなざし}になった。

「うちに帰ってきてても、何カ月ものあいだは夜もろくに眠らずに、独りで泣いてるか怒ってるか、さもなきや親兄妹弟の誰かをつかまえてかき口説き、しゃべってるうちに頭に血がのぼって暴れ出すという有様でしてね。親父が、可哀相だが座敷牢^{ざしきろう}を造って閉じ込めるかって言い出して、おふくろにこっぴどく叱られてました」

そこで言葉を切り、平吉はまばたきをして、おちかと富次郎の顔を見た。

「ですからこのとき、座敷牢は造らなかつたんです。造らなかつたんですが、造るならここになつてんで、納戸を一つ空けたんです」

三好屋の北側の奥、広さは三畳ほど、板敷きの納戸で、古着や古道具などをしまっていたところだという。

「その中身をみんな出して、ちゃんと大工を呼んで下見させていましたから、親父はけっこう本気だつたんでしょう」

「本気はともかく、本当にならなくてよかったですね」

おちかの言葉に、平吉はうなずいた。なぜか、ぎくしゃくしている。

「遅まきながら日にち薬も効き始めて、おゆう姉ちゃんもだんだんと落ち着いてきましたからね。まあ、よかったです。んで、納戸を元通りに片付けようとしたら、古着なんざ傷んだり黴^{かび}てたり、古道具の類^ぐいもがらくたみたいなもので、何だこりゃっておおかたは捨てることになって、その三畳の納戸が空^すいたんです」

二畳分ほどは空いたという。

「北向きの、天井の近くに明かり取りが切つてあるだけの薄っ暗いところでした。そこが、ぽかんと二畳分くらい空いてた。先の話に関わりがあるんで、覚えといてくだせえ」

平吉はずいぶん落ち着いて、話の舵を自分でとり始めている。これは富次郎の筆の芸のおかげだろう。

「すっかり痩せて、身体も弱ってましたから、おゆう姉ちゃんが何とかまともに寝起きできるように戻るまで、一年近くかかりましたかねえ。人前に出るのはみっともねえから嫌だつて、商いの手伝いをするとはなかったけども、炊事だの掃除だのは進んでやつてくれて」

——あたしは出戻りの居候だから。

「女中より肩身が狭いとか言つてましたよ。だからでしょうよ、やつぱり肩身の狭い梅兄——」
のつべらぼうに〈病〉と一文字書かれている三男である。

「梅兄とはよく話をしたり、世話を焼いたりしてました。やれ熱が出た、咳が出る、背中が痛い頭が痛いっていつちゃあ、医者通いをしいの生薬を買いいのつて兄ちゃんでしたから、そのたんびにおゆう姉ちゃんが付き添つてやつて。はみ出し者同士、お互いに気が楽だったんでしう」

武家と同じく、商家でも跡取り以外は「部屋住み」である。息子なら養子先を探す、商いに励んで分家してもらえただけの力をつける。娘なら良談をつかむ。自分の身を立ててゆくには限られた道しかない。

何とかしてその道のとば口にたどり着けなければ、一生実家で居食いのままだ。親が元気なうちはまだいいが、お店が兄姉の代になったらただ氣詰まりなくらいならましな方で、厄介払いされてしまうことだつてあり得る。

おちかは、ちらりと横目で富次郎を見た。この気のいい従兄も次男坊である。けつして三島屋の居候ではなく、先々のことを恃^たまれてゐる頼もしい倅ではあるが、跡取りでないことははっきりしている。

富次郎は平吉の語りに聞き入っている。何かひと言あるふうでもない。

「そうやってね、おゆう姉ちゃんと梅兄がときどき連れ立って出かけるようになって——それが、いよいよこの話の大本のきつかけになるってわけなんです」

平吉は十歳。二十二年前の夏の盛りの、ある日のことだった。

「八ツを過ぎて、手前が近所の手習所から帰ってくると、うちの勝手口のところにおゆう姉ちゃんがいちたんです。こつちに背中を向けて、誰かと立ち話をしてるようなんですよ」

離縁からは二年余りが過ぎても、おゆうはしおしおと暮らしていたし、依然、近所の人たちの目は憚^{はば}りがちだった。

「外面では愛想よくしてたつて、近所のおばさんたちなんか、みんなして、哀れな出戻り娘だねえつて、あたしの陰口をきいてるに決まつてると言ひまして」

だから、こんなことは実に珍しかった。

——誰としゃべってんだ？

子供心にも興味を引かれ、平吉はつと物陰に寄って、おゆうの様子を見守った。

油照りの日だった。おゆうも日差しが眩^{まぶ}しいのだろう、額の上に手をかざしている。そして首を縮め、目を細めて、小声でひそひそやっている。

立ち話の相手は、おゆうの陰に入ってしまったっているらしく、平吉のいるところからは姿が見えない。背伸びしてみても駄目だ。

「そうこうするうちに、おゆう姉ちゃんがこう身を折りましてね。深々と頭を下げました。で、そのときだけは、いやにはつきりした声で言っただんです」

——それじゃ、どうぞお入りください。

「それで、後ずさりして道を空けたんです。ちょうど人を通す感じですよ」

お客かと、平吉は思った。ってことは、何か土産物があるかな？

「手前は食い盛りの腹っぺらしでしたからね。いつだって真っ先に食いもののことを考えちゃうわけで」



こりや嬉^{うれ}しいとわくわく眺^{うかが}めていたが、おかしなことに気がついた。

「誰もいないんです」

おゆうはかしこまって勝手口の外に控えている。また頭を下げたので、誰かがそばにいて今にも勝手口から中に入ろうとしているのなら、平吉にも姿が見えるはずだ。

「けど、いないんです。おゆう姉ちゃんだけなんだ」

おゆうの足元には濃い影が落ちている。影はその一つだけだ。ほかに人はいないのだ。

——何^{なん}だあ？

と、おゆうがしゃっきり頭を上げ、素早くまわりを見回した。平吉は頭を引っ込めて隠れたが、そのとっさにも、おゆうが思い詰めたような怖い顔をしていることは見てとれた。

「姉ちゃん手前には気づかなくて、まるで逃げるみたいに勝手口のなかに飛び込むと、ぴしゃんと戸を閉めちゃいました」

平吉は狐につままれたような気分だった。

「そういうとき、ガキは遠慮^{えんりょ}してもんを知りませんからね。物陰から飛び出して、姉ちゃんのあとを追っかけてって」

勝手口の板戸に手をかけ、開けようとして、思わずえづいた。

「吐きそうになったんですか」

「へい。鼻が曲がりそうな、嫌な臭いがしたもんですから」

一瞬だった。臭いはすぐに散った。だが勘違いではない。「げええ」と声が出てしまったくらいなのだ。

「どんな臭いだったのか、何かに喩えていただけますか」

おちかの問いかけに、平吉は口をへの字にして、しゃにむに指で鼻の下を擦った。

「魚の腐ったような臭いっていう言い回しがありますよね」

「ええ」

「手前も、食いの屋をやるようになってよくわかったんですけども、魚の身が腐っただけなら、騒ぐほど臭くはねえんですよ。鼻をつまむくらいで済みます。本当に臭いのは、魚の腸が腐った臭いの方なんです」

そっちはまさに「げええ」だという。

「あれは、そういう臭いでした」

何とか息を整えて勝手口から入ってみると、そこには人氣がなかった。

「毎日、手前のおやつに、女中がふかし芋をつくって水屋に入れとってくれるんですけどね。それをもぐもぐ食ってても、誰も来やしねえ」

客がいるなら、姉ちゃんたちか女中たちが湯を沸かし、茶を淹れにくるだろうに。

「客がお土産をくれたなら、そいつを持ってくるかもしれねえしって、手前はどこまでも食い意地が張ってた」

しかし、粘っていても甲斐はなかった。

ますます狐につままれたような気分だったがなにしろ子供のことである。しかも平吉はあわてんぼうだ。

「家のなかでも手習所でも、それでしょっちゅう叱られたり笑われたりしてましたから、自分は

粗忽者なんだって、だんだん心得てきました。うっかりこれこれこんなことがあったけどありや何なのなんて口に出して、やぶ蛇になるのは御免でしたから」

大人には大人の用があり、それは子供にはわからないことの方が多い。深く気にすることはなく、平吉はその奇妙な一件をころりと忘れてしまった。

「おゆうさんに、変わった様子はなかったんですか」

「そこがまた難しいんですよ」

出戻ってからこつち、おゆうはだいたいいつも元気がないわけで、口数も少なく、ひっそりと隠れるように暮らしており、

「幽霊画の幽霊よりはちつと生気があるかな、というぐらいでしたからね」

家族とも笑って無駄話をするようなことはなかったから、末っ子の平吉がちよろちよろ寄っていく機会もなかった。

「梅兄だけは別でしたが、この兄ちゃんもまた、家のほかのみんなから遠ざかっているというか、遠巻きにされてる」

「変わった様子があったとしても、わかりにくかったんですね」

「へい。それがあとになって崇^たるんですけどもいざ崇^たつてくるまでは、誰も何にも気づかなかった。知らなかったんです」

平吉は、しみじみと噛^かみしめるような口調になった。

「振り返ってみれば、手前だけじゃねえ、三好屋のみんなが粗忽者だったんでしょ。意地汚えのも手前一人じゃなかったし」

その語りは、苦い悔恨に満ちている。

勝手口でおゆうの奇妙なふるまいがあつて、半月ほど後のことである。

季節は夏から秋のはじめへと移り、朝晩はひんやり冷えるようになった。きつとそのせいだ。平吉はおねしよをした。朝起きたら、布団の上に水たまりができていた。

こんな不始末は久しぶりだった。本人も顔から火が出るほど恥づかしかつたが、それ以上にとつつあんが烈火の如く怒つた。

歳の離れた末っ子だから、平吉は、普段は両親に甘やかされがちだった。おねしよで叱られること自体が初めてである。なぜ父親がこんなに怒るのかわからない。

ただ察しはついた。松兄のせいだ。つい昨日、長男の松吉がまた大枚の借金をして、一文も返さず逃げ回っているからと、金貸しを取り立てに乗り込んできたのである。

——松吉の奴め、どこまでうちの看板に泥を塗つたら気が済むんだ。

おとつつあん、顔色が変わつちまつたもんな。そのとばっちりがこっちにきたんだ。

あわてんぼう、粗忽、早合点。どう評してもいいが、そういう氣質たは、裏を返せばおつむりがよく回るといふことでもある。加えて、そのおつむりがはじき出したことをすぐ言つてしまう。つまり口も軽い。

平吉はそれを地でいく子供だった。

「おとつつあん、ちつと落ちて置いておくれよ。ホントはおいらじゃなくて、松兄ちゃんを怒りたいんだろ？ お得意さんの前で恥をかかされたつて、竹兄ちゃんも怒つてたもんよ」

子供のこういう生意気口は、親の怒りの火に油を注ぐだけである。

「てめえも松吉も、できそこないってことじゃ一緒だ！」

怒声一発、おとつつあんは平吉の寝間着の後ろ衿をひつつかむと、そのまんま廊下をずるずる引きずっていった。

「てめえのような奴は干乾しにしてやる。性根が入れ替わるまで出てくるな！」

平吉を北の納戸に放り込み、女中に心張り棒を持ってこさせて、動かぬようにがっちりとかってしまった。

「いいか、儂がいいと言うまで、誰も平吉を出しちゃんならん。水一滴だつてやつちゃんならんな！」

閉て切られた板戸の向こうで、おとつつあんはがみがみ怒鳴っている。平吉はまた小便をちびりそうなほど震え上がり、縮こまる。

と、そこへ誰かが駆けつけてきた。おとつつあん、おとつつあんと呼びかけているのは、

——おゆう姉ちゃんだ。

あの姉ちゃんでもこんな大きな声を出せるのか。自分の放り込まれた窮状を忘れ、一瞬、平吉がそんなふうにいるほど、切羽詰まった甲高い声だった。

——姉ちゃん、おいらをかばってくれるんだ。

平吉はほつとしたが、残念ながらそういうことではなかった。

「おとつつあん、やめて。勘弁して」

「親の躰しっけに口出しするな」

「平吉のことじゃないの。そこはいけないの」

「何がいけないんだ」

「その納戸は駄目なのよ。閉じ込めるなら、他所^{よそ}にして。物置でも押し入れでもいいじゃないですか」

え？ 何だよ何だよ、姉ちゃんたら。

「その納戸には神様がいるんです。あたしの願いを聞いてくださる大事な神様なんです。平吉がそこでおしっこなんかしたら、何もかも台無しになっちゃうわ」

おめえも何を取りのぼせているんだと、おとつあんはさらに怒る。どたばた、ばちん、きゃあ！ 取りすぎる姉ちゃんを、おとつあんが張り飛ばしたらしい。

さあ大変、板戸の向こうは大騒ぎだ。家族はもちろん番頭や女中たちまで集まってきて、宥めたり謝ったり慰めたりで、そのうち、どやどやと遠ざかっていつてしまった。

平吉は置き去りだ。ひでえや。

——おいら、ホントに干乾しになんのか。

もともと北向きの日当たりの悪いところで、しかもその日は曇天だった。床に尻をくつつけ両手で膝を抱えて見回せば、古ぼけた行李^{こより}や木箱が積み上げられている隙間に、蜘蛛が巣を張っている。埃臭^{ほこり}くて冷え冷えしている。

かつてこの納戸が、おゆうのための座敷牢になりかけたこと。そのとき片付けたきりだからけっこう空いているのだということを、平吉は知っていた。よろずにこまっしやくれたところのある三女のおみちが、訳知り顔で教えてくれたことがあるからだ。

「女もあんなつちゃおしまいよね。おゆう姉さんは、いっそお寺に入っちゃまえばいいのに」

不幸な経緯いきさつで座敷牢にされかけた場所ではあるが、もとは納戸で、今も納戸だ。怖いわけはない。

理屈ではそうなのだが、しかし怖い。理屈の通らないところが怖い。おねしよで濡れた寝間着のまんまだから、冷たくなってきて寒い。

ひとまず我慢しよう。いい子にしていよう。そしたらすぐに誰か来て出してくれる。騒いだら、いつまでも勘弁してもらえない。

平吉は膝のあいだに顔をつ込んで丸くなった。どのくらい、そうしていたろうか。

そろりそろりと頭を持ち上げてみる。

まわりは静かだ。誰も戻ってこない。

泣けてきそうになって、堪えていたらしゃっくりが出始めた。しゃっくりを止めるために息を止めていたら、苦しくてふはっとなつて、その拍子に一気に堰せきが切れてしまった。

平吉は躍り上がって板戸に飛びついた。

「わーん！　ここから出しておくれよお！　もうおねしよはしねえ。けっしてしませんから、出しておくれよお！」

拳を固めて板戸を打ち、じたばたしながら泣いて喚いて、鼻水をすすり上げながらまた大声で叫ぶ。

「おとつつあん、ごめんなさい！　出してよ、出してよう！」
そのときだ。

平吉の右耳のすぐ後ろに、生暖かい息がかかった。

「うふふ」

小さな含み笑いが聞こえた。

板戸に張りついて、平吉は固まった。

今のは誰だ。

振り返ってみるのがおっかない。

すると、また聞こえた。今度は小さなため息

か、いや鼻息じゃないか。そして、

「あんたのおしっこ、いい匂い」

女の声がそう囁きかけてきた。

おっかさんではない。姉ちゃんたちでもない。

女中の誰でもない。全然知らない女の声だ。

ちよつと笑いを含んでいる。

板戸にべつたりと腹をくつつけたまま、平吉は震え出した。

「だ、だ、だあれ」

口も震えて呂律がまわらない。

「おいしいものを食べているから、いい匂いがするんだよ」

女の声は、いっそ陽気で楽しげだ。

「あんたもおいしそうだねえ」

平吉は膝ががくがくし、両の掌をいっばいに広げて、ヤモリのように板戸にへばりついた。心



の臓が躍り、冷や汗が噴き出してくる。

続けて、女の声が問いかけてきた。

「ここから出たいかえ」

出たい。すぐ出たい。平吉は必死にうなずいた。ちゃんと返事をしないと足りないかと、
「出たい。出してください」

震える声で頼んだ。

「じゃあ、代わりに何かちょうだいな」

平吉は横目を動かし、自分の右耳の後ろにいるらしい女の姿を見ようとした。

頭を動かさなければ無理だ。あんまり目を瞞っていると、また涙が浮いてくる。

「な、何か？」

「そうよ」

「なに、何を？」

また、うふふと含み笑い。

「あんたには、まだ無理かねえ」

聞けば聞くほどに、聞き覚えのない声だ。

「あんた、いくつ」

「と、とお」

「あら、もつと小さいかと思った。どのみち、おねしょ小僧じゃ、まだ自分にとって大事なもの
を選ぶだけの分別もないか」

女は平吉を眺め回している。ただ「見て」いるのではない。目で舐め上げ、舐め下ろしている。平吉はそれを感じ、変なことを思った。味見されてるみたいだ、と。

「しょうがない、今日のところは、こっちで値をつけてあげよう」

何が嬉しいのか、猫が喉を鳴らすような音をたて、女がそう言ったかと思うと、板戸の外でがたと物音がした。心張り棒が外れたのだ。平吉の足の裏にも、それが伝わってきた。

息をひとつするくらいあいだ、平吉は板戸にはりついたまんまでいた。それから、引きむしるように板戸を開けて廊下へ転がり出た。

勢い余って向かいの壁におでこをぶつける。ごつんと音がして目から火花。それでも首をよじって振り返った。

足元に心張り棒が転がっている。

納戸の板戸が閉まってゆく。

その刹那、平吉は見た。女の着物の袂の端がふわりとふくらんで見えたのだ。薄紫の地に、蔦つたのつるみたいな模様がついている。

とん。

板戸が閉じた。かすかな風が平吉の鼻先をかすめる。

「げええ」

鼻が曲がりそうな、あの臭いがした。